

報告)「クリスマス語る ：スウェーデン、ダーラナ地方の1村落からⅢ.

総合社会学部 古川 まゆみ

本稿は、2007年度『京都文教大学人間学部研究報告 第10集』および2013年度『同総合社会学部研究報告 第16集』に掲載した同題目拙稿の最終編である。2007年度稿では、クリスマス質問表の内容紹介、意図および背景説明、オリジナル質問表（スウェーデン語）の掲載を行った。2013年度稿では、回答結果の報告を試みた。最終報告となる本稿では、質問表の順番（A.～H.）に従い、自由記述（H.）を除いた7項目の回答結果のコメントを行う。なお、章の番号は2013年度稿に続くため、今回は第Ⅳ章からとなる。

Ⅳ. コメント

A. 装飾品

ろうそく2種（「ろうそく」、「アドベントのろうそくスタンド」）を筆頭に「クリスマスツリー」、「クリスマスプレゼント」、「ヒヤシンス・ポインセチア」、「わら細工」と続いた順位は、私自身の観察からも納得できる結果であった。特にろうそくが上位を独占したことは、第Ⅰ章で述べたろうそくの年間売上量の約半分がクリスマスシーズンに集中していることをここでも裏付けている。「ろうそく」の炎はイエス・キリストの象徴、「アドベントのろうそくスタンド」はキリストの降臨を待ち望むためと、これらが飾られる背景には、キリスト教の要素が本来ある。しかし、後半の「G. 聖書・教会・装い」の節で報告するが、人々はクリスマスの宗教的側面を必ずしも意識して

いない。本節でも、キリストの生誕を表した飾りものである「馬小屋」は、下から3番目の低さであった。日照時間が極端に短くなるクリスマスの厳冬期は「暗い」をはるかに超えた「まっ黒」の季節である。この闇の時期を少しでも明るく、暖かい気持ちにさせるため、ろうそくの光は、宗教的な意味合い以上に、実生活の必需品としての役割を多分に持つと思われた。

スウェーデンのクリスマスといえば、わら製品が雑誌やクリスマスマーケットで大きく取りあげられる。しかし今回、「わら細工」が6位、「穀物の束」は8位と、必ずしも上位には挙がってこなかった。特に「穀物の束」はクリスマスカードにも描かれ、ストックホルムの国民的な野外博物館「スカンセン」、ダーラナ地方の伝統的なホテルでは必ず目立つように飾られている。にもかかわらず私自身は、村でこれを1軒しか発見できず、「今年は飾らないが通常飾る装飾品」の中に含まれていた2軒を考慮しても、低い値である。おそらく、わらの入手や重量のあるわら束を個人が作ることの困難さが背景にあらう。ただわら製品が広く浸透していることは実感でき、「わら細工」の記述欄にも、絵を描いたり、手作りの品を紹介したりと飾り手のわらに対する親近感は十分に伝わってきた。最も多かった「山羊」は、現在クリスマスツリーの下によく置かれているが、スウェーデンを代表する伝統的な飾りものの一つである。

このほか「クリスマスツリー」の記述欄に、「紙キャラメル」、「国旗」、「りんご」、「（紙

製) 編み細工菓子入れ」があったが、これらも今日スウェーデンの伝統的なクリスマスを紹介する際、登場する飾りものである。しかし、順位はいずれも6位以下であった。これらすべては、「10年または20年以上前、あるいは子どもの頃にあった飾りもの」の回答欄に挙げられていたが、そこにはほかにも「ツリーに飾られたたくさんの食べ物」、砂糖菓子、クッキーなどの記述があった。つまり、上記伝統的なクリスマスツリーの飾りものは、国旗以外、すべて食べ物関連である。この中で「復活させたい」として選ばれたものは、「紙キャラメル」と「りんご」の各1つだけであった。かつてクリスマスには、菓子やりんごをクリスマスツリーに沢山飾り、クリスマスが終了するとそれを食べることが楽しみだったと村で聞いたことがある。しかし今日では、日常的に手に入るこうした食べ物をあえてこの時期に飾る必要はなく、アンケート結果で上位を占めたのも、ガラス玉、飾り紐、(電気の) ろうそくなど今日街で一般に見られるものばかりであった。また上記「(紙製) 編み細工菓子入れ」は折り紙に似ているが、綺麗に作るには時間がかかるという。このように伝統的な飾りものは、数値上、下位に位置していたのだが、少数ながらこれを選択した人々にとって、「あるべきクリスマスの祝い方」(例えば、上記ストックホルムの「スカンセン」で展示されているように、本物のろうそくと生のりんごだけを飾ったツリー) は不可欠であり、これをかなり意識してクリスマスに臨んでいたことも事実である。

B. 食事

「クリスマス用ハム」が最も多く、「パン」、「おかゆ」、「しょうが入り薄焼きクッキー」、「クリスマスの甘菓子」と続いた順位は私の経験からも理解できることであった。しかしすでに第Ⅰ章で断っておいたようにアンケート作成時の時間的制約のため、

私が食したもののすべてを選択肢に挙げていたわけではない。案の定、記述回答欄には、「ミートボール」、「にしんの酢漬け」、「赤カブのサラダ」、「小イワシのグラタン(別名『ヤンソン氏の誘惑』)」など、他の代表的なクリスマス料理も記してあった。記述による回答は、選択肢によるものと比べ、回答率は低い。このためこれらの記述は、冒頭に挙げた「クリスマス用ハム」や「パン」など選択肢の上位に挙がった料理と同じくらい実際には食されていた可能性もある。それにしてもクリスマスシーズンになると、新聞や雑誌にはクリスマスの食卓の写真が大きく掲載されるが、中央に占めるのは美しく飾り付けをされた豚のハム(「クリスマス用ハム」)である。今回のアンケート結果はこれを想起させるものであった。

「現在はもう準備しないが、10年または20年以上前に準備していた料理」で最も多かったのは、本節冒頭の選択肢回答で下から2番目の「ルートフィスク」である。これは第Ⅱ章で解説したように、干しダラを時間をかけて柔らかくし、ホワイトソースで煮込んだものである。冷蔵庫などなかった時代、生の魚が日常的に食べられなかった頃の料理という。大変美味ではあるが、調理には時間と手間がかかることを知人宅で聞いた。現在では調理済み食品が売られてはいるが、実際に準備した家は「今年は準備しなかったが、通常は準備する」の1軒を入れても23軒と非常に少なかった。また「復活させたい料理」の中にも入っていなかった。ただ少数ながらこの手間のかかる料理を手作りした家が5軒あり、そのうち4軒は一人で調理していた。またこの5軒は選択肢のリストに載せた他の料理についてもほとんどが手作りであった。

手作りについて更に述べると、「10年または20年以上前、あるいは子供の頃にあった料理」の記述回答欄でも目立っていた。たとえば一番多く挙がったソーセージについて、30代の女性は「実家では自家製ソー

セージを作っていた。とっても楽しかった。でも今は時間がない。」と記している。他に挙げた食についても、特に手作りか否かを問うているわけではないにもかかわらず、この女性のように「手作り」を示唆した回答が多かった。例えば、「(屠殺後の血を原料にした) ソーセージ」、「自家製バター、チーズ」、「塩漬けにして炊いた羊の肉」などである。また「復活させたい料理」の中でも「手作り」はやはり強調され、ここでもソーセージが筆頭に挙がっていた。その中に、70代の男性の記した「簡素なクリスマスの食事」というものが目をとめた。これはやはり70代の女性が子供の頃を回想して記した一文、「私の両親はあまりクリスマスの料理を用意しなかった。ルートフィスクに、豚肉に、おかゆがあっただけ。」と共通するものを感じた。おそらくこの男性の意味する簡素な食事とはこうした料理を指すのであろう。スカンセンに展示されていた農家のクリスマス料理もチーズ、パン、おかゆなど非常に質素な食卓であったことを記憶している。このほか「パン」についても、昔ながらのパン焼きかまどを備えている家が多く、村の公民館にもパン焼き部屋があるため、「購入ではなく自分で作った料理」の中ではこれが最も多かった。「家族が多い場合、購入すると高くつく」、「クリスマスの時だけではなく1年中、自分で焼く」と村人は話していたが、こうした「パン焼き」の習慣化がその背景にはあったようである。

C. クリスマスの準備

選択肢に挙げた開始時期としては、「12月前半」が最も多く、「11月後半」、「12月半ば」、「11月半ば」と続いた。「装飾品」の節で述べた「アドベントのろうそくスタンド」が11月の最終日曜日に飾られるため、この前後の時期にクリスマス準備が本格化するようである。前節最後に言及した「パン焼き」についても、「今年の準備状況」

欄の記述回答者、全15名のうち、9名がこの時期にパン焼きを行っていた。しかも2名を除き、準備行為の筆頭にこれを記している。偶然とはいえ、「パン焼き」はクリスマス準備の開始を象徴するできごとなのかもしれない。また記述の回答率が概して低いこと、そして私自身の経験から実際に「パン焼き」を行っていた家がほかにもあったことを考えれば、準備段階における「パンを焼くこと」の重みを感じた。このほか筆頭に挙げた率はやや低かったものの、同時期に行われた2番目の行為として「クリスマスプレゼントの購入」があった。これについては後節で述べたい。

記述回答全体の中で一番多かったのは、「大掃除」である。これは「パン焼き」や「プレゼントの購入」とは異なり、最終段階での準備行為であった。ほとんどが12月に入ってからと記しており、クリスマスの1週間前に行う例も散見された。クリスマスを迎えるということは、新年を迎えることと同じ意味を持つ。大掃除は日本と同様、1年の汚れを落とすために欠かせない行為と言える。このほかには飾り付け、食べ物の準備が記されていたが、食べ物に関しては、1例を除き、ケーキやクッキーなどの「菓子」を指していた。準備行為を振り返った際、楽しく思い出せたものを回答したのかもしれない。

D. 祝う場所・ともに祝う人々

「祝う場所」としては、12/24のイブおよび12/25のクリスマスの両日とも、半数以上が「自宅」(村内)を選んでいった。特にクリスマス当日(12/25)はこの割合が高くなり、「(今年は違うが)通常クリスマスを過ごす場所」として選択した4例を加えると、全回答者46名中、40名が自宅であった。また子供や両親宅を選択した場合でも、彼らが村内に居住していることがしばしばあり、村はクリスマス両日を過ごす場所として定着していると言える。なおダーラナ

地方以外で過ごしたのはイブが3名、クリスマスでは4名とわずかながら存在したが、いずれも親族と一緒にあった。クリスマスが家族とともに祝う期間であることを示すとともに、「本物のクリスマスはダーラナ地方で祝うもの」という言説が健在であると感じた。

「ともに祝う人々」は、今述べたように親族に限定されたが、「クリスマス客」（この時期に一人で過ごす人が客として招待されたこと）を迎えた例がイブとクリスマス当日にそれぞれ1例ずつあった。愛と寛容の季節、クリスマスならではのキリスト教精神にもとづくと考えられる慣習である。人数に関しては、イブの17名が最も多く、最も少ないのがイブ、クリスマスともに2名であった。知人宅では20名ほど集まっていたため、10名ほどを予想していたのだが、10名を超えたのはイブでは4例、クリスマスでは1例のみであった。最も多かったのは、両日とも5名から9名であるが、プレゼント交換、ユール・トムテの来訪には十分対応できる人数であるため、決して少ない数字とは言えないであろう。なお「亡き父親」を「通常、クリスマス・イブとともに祝う人々」の欄に加えた女性が一人いた。クリスマスは亡くなった親族を偲ぶ時期でもあり、教会墓地には無数のろうそくが灯される。この時期、父親は、昔日のようにクリスマスとともに過すため、家族のもとに戻ってくると彼女は信じていたのかもしれない。

E. ユール・トムテ

回答者の半数以上の家で、ユール・トムテ（スウェーデン版サンタクロース）が来訪していた。この役に就いたのは主に20代から40代の男性であったが、60代以上や女性という回答も少数ながらあった。ユール・トムテの役割は子供たちにクリスマスプレゼントを届けることである。このため、幼い子供がいる場合は、必ずやってくるとい

う回答結果が大半を占めた。中には、子供の有無にかかわらず、ほぼ毎年やってくるという回答もあり、大人のみで祝う際、ユール・トムテがクリスマスに欠かせない余興になりうることを物語っている。

ユール・トムテは家族に暖かく迎えられ、子供たちに決まり文句を発する。「この家によい子はいかな」、「1年間よい子だったかな」などである。回答欄の選択肢に載せた「ユール・トムテが来るのを待っていたが、彼が現れると子供は落ち着かなくなり、少し怖がっていた」は、私が知人宅で目にした光景であるが、これを選択した数は10名で、その反対である「全くこわがらなかった・すぐに（子供はユール・トムテと）おしゃべりを始めた」の12名をやや下回っていた。現在、ユール・トムテはニコニコ顔のサンタクロースと同じく「やさしいおじいさん」のような存在である。子どもたちとおしゃべりを楽しみ、ツリーのまわりを一緒にダンスをし、帰り際には「また来年も来てください」と声をかけられてお菓子のプレゼントをもらうこともある。しかし、彼はお面をつけて現れることが多く、その表情は必ずしも「やさしい」と形容できるものばかりではない。不気味さを感じる時もあった。子供の頃のユール・トムテの思い出として、いずれも40代の村人二人による『「ここによい子はいかな』とユール・トムテは尋ねたのですが、私は返事をしませんでした。』、「覚えているのは、ただ（ユール・トムテが現れた時）テーブルの下に隠れたことだけ」という記述があった。ここから明らかなことは、子供たちがユール・トムテと直接話をしたり、対峙することができなかったということである。その理由は、別の村人が記した「昔のユール・トムテはもっと厳しい表情だった」（40代）という一文から説明は可能であろう。子どもたちがユール・トムテに畏怖の念を抱くことは、上記の結果からも現在はいなくなったようである。しかしユール・トム

テには「親しみ」や「優しさ」以外の側面があったことは銘記すべきことと思われた。

ユール・トムテの決まり文句や贈り物を届けるという役割に関しては、世代による大きな差異は見られなかった。しかし、ユール・トムテが帰る際、彼に渡す贈り物の中身には違いがあった。現在はクッキー、チョコレート、クリスマスの甘菓子など菓子類が多いが、40代以上の場合、彼らが子供の頃には、おかゆ、固パンなど本来クリスマスの食卓にあがる食べ物が主だったのである。ユール・トムテには、かつてスウェーデンの農家に棲んでいたという小人、「トムテ」の要素が内在している。この小人は棲み着いた農家のために1年中働いたため、農家の人々はそのお礼としてクリスマスの時期におかゆを与えたという。調査当時、ユール・トムテが帰る際、おかゆを渡した家は1軒のみであったが、その行為をかつての民間信仰と関係づけて考察することも上記ユール・トムテ像の変遷と合わせて興味深いと感じた。

F. クリスマスプレゼント

クリスマスに親族が集まる際、プレゼント交換は恒例行事になっている。これは子供のみならず、大人も対象にしている。回答者44名中、2名を除いた全員がプレゼントを渡していた。一人が渡した人数は6名から12名が最も多く、次が5名以下であった。11名から15名および21名から29名と答えた人も各4名ずつあり、2名が16名から20名と答えていた。一人が渡す人数としてはどれもかなり多い。イブの晩に集まった者同士で交換するが、最も多かった上記6名から12名は、前記D節の「ともに祝う人々」の中で最多を占めた5名から9名の値に近似している。渡した相手は圧倒的に家族や親族であり、友人やその他に渡したと答えた人は全体の2割以下にすぎない。親族には義理の父母、息子、娘そして子供の婚約者の親やその子供まで含まれること

がある。広範囲な親族関係の認識がプレゼントの総数が膨らむ背景にあると思われた。

プレゼントの準備を意識し、本格的に購入する時期としては、12月始めが最上位に挙がったが、クリスマスの2ヶ月以上前からという回答も少なからずあった。前記C節で述べたように、プレゼントの購入は、12月前半に行われるクリスマスの準備行動の中でパン焼きに次ぐ高い割合を占めていた。プレゼントを熟考する時間、購入量、金銭的負担などを考えると今後の継続が気になるころだったが、7割近くが金銭的負担を感じていず、「とても楽しいのでこれをやめたくはない」と答えていた。やめたいと答えたのは5%弱である。またプレゼントには半数以上がメッセージを添え、贈り物に意味があることを伝えていた。選び方としては「役にたつようなものを選んだ」が最も多かったが、そのことは決して高価な品物を贈る必要がないことを意味している。また贈り手は同時にプレゼントの貰い手でもあり、この互惠関係も継続の背景にあると思われた。

G. 聖書・教会・装い

イブまたはクリスマスの日に聖書を朗読したかについては、圧倒的多数が「読まない」という回答であった。さらに「読む」と答えた回答者のうちでも「ほぼ毎年聖書を読む」割合は半分にすぎず、残りは「ごくまれにしか読まない」、「時々読む」と答えたため、聖書朗読に対する積極的な姿勢を読み取ることはできなかった。また「読まない」と答えた者が、以前、読んだことがあるかについては、「時々読む」が2割ほどいたものの、大多数が「ごくまれにしか、あるいは全く聖書を読まない」を選択していた。このことからクリスマス期間における聖書の朗読は、一般的な恒例行事ではないと結論できる。ただ上記「読む」と答えた者のほとんど全員が今後の可能性について「絶対に読む」と答えており、そ

の中で「強制されて読んだ」者が皆無だったため、少数ながら熱心なクリスチャンの存在も確認できた。

教会訪問に関しても消極的な回答が多かった。イブまたはクリスマスの日に教会に行ったことがある者は4割弱しかおらず、更に「ほぼ毎年行く」のは2割にも満たなかったのである。7割近くは教会に行かなかったと答え、最も多かった選択肢は「今までに教会に行ったことはほとんどまたは全くない」であった。この回答と「一度も行ったことがない」を合わせると、教会への訪問経験が極端に低い者の割合が4割弱になる。また今後の訪問可能性についても、4割強が最多の「行かない」と答えていた。しかし全体としては、「おそらく行く」・「絶対に行く」を合計すると6割弱になるため、聖書の朗読と比較すれば、肯定的な回答を最終的には得たと言えよう。

なお教会の訪問率が低い理由として、公共の交通機関が使えないことを挙げた村人(60代)がいた。祝日の早朝にはバスが通っていないため、マイカーを持たない場合、出席不可能という。スウェーデンのクリスマスミサは早朝に行われる。朝7時には開始されるこのミサへの出席に車は不可欠である。またたとえ車があったとしても厳寒期に暖房のない教会に行くこと自体、相当なエネルギーが要る。出席率の低い背景にはこうした宗教心とは別の現実的な制約があったことも考慮する必要があるだろう。

「装い」に関しては、「綺麗な恰好をした」割合が75%で「普段と変わらない恰好をしていた」の25%を大きく引き離していた。特に子供はこの時、新しい服や靴をおろしてもらうことが多く、知人宅や村のクリスマスの集まりの際も子供たちはみな新しい服を着て嬉しそうだった。クリスマスに新年を感じたのはこの時である。「民俗衣装」の着用に関しては、1名の回答があった。しかし夏至祭とは異なり、クリスマスに民俗衣装を着ることはほとんどないとい

うのが村人大半の意見であった。知人宅ではほぼ全員が着用していたが、これは例外的だったようである。

おわりに

『ウェールズのクリスマス』という本に、上ってきた時と下りる時の数が絶対に合わないという不思議な階段の話が載っていた。妖精たちの仕業だという。まさに同様のことをアンケートの回答結果を集計中に私も経験した。何度数えても、見落とし、新しい発見、誤記が見つかり、決定的な数値を導き出すことが難しかったのである。画家が油彩画を完成させるまで膨大な数の素描を描くというが、私の場合、アンケートの集計、記述の読み取りがその素描作業であった。しかし時間はかかったものの、1村落におけるクリスマスの営みを再現し、曲がりなりにも記録として残せたことに安堵感を覚えている。

スウェーデンのクリスマスは、本稿で報告したように飾りものや料理の種類が大変に多い。贈り物も世代間を超えて広範囲に交換される。ユール・トムテは時に恐ろしい仮面を付けて登場するが、スウェーデン人にとってこれを欠いたクリスマスは想像がつかないという。準備期間も長い、人々はそれを楽しんでいる。ある村人が「私はクリスマスが好き。その日だけではなくその前の準備や段取りを決めることもね。伝統に倣ってするようにしているわ。私の子どもたちが子供の頃を思い出し、この伝統の一部でも引き継いでくれたらと思うの」(40代の女性)と述べているが、この時期は人々が「伝統」を意識する時でもある。装飾品や料理の説明を受けた時、パン焼きかまどを使って本格的にパンを焼く作業に参加した時、スカンセンのクリスマス展示を見た時、私もそのことを実感した。また滞在したダーラナ地方のシリヤン湖畔は国内で最もスウェーデン的、伝統的と言

われている場所である。その1村落でクリスマスの実相を知り得たことは大変幸運であった。今回は報告事項が多岐に渡ったため、クリスマスと伝統意識についてあまり触れなかったが、今後取り組むべき課題と認識している。

参考文献)

マース、ジェーン・マイケル 1995 『ウェールズのクリスマス』 径書房